

## 泉井久之助著書論文目録

京都大学大学院人間・環境学研究所 山口研究室 編

### 1927年

「印欧語におけるインフィニティヴの発達」(京都大学卒業論文) 1927年12月の日付がある。『一般/十一』

### 1928年

「言語哲学」『京都帝国大学新聞』、1928年9月21日、10月1日。『一般/三』

「音韻法則上の一問題」『芸文』第十九年第十一号(大典記念号)『一般/五』

注：1943年7月付けの付記あり。

### 1929年

「言語学概説(一)」『続国文学講座(三)』文献書院(東京・京都)。

注：以後1931年8月まで八回連載、著者名は「新村出」。『新村出全集索引・書誌』によれば、『言語学概説』(述) 注 以後昭和六年八月まで八回刊。泉井久之助筆」とある。因みに『新村出全集』にはこの著書は収録されていない。

(翻訳) アントワヌ・メイエ「言語の分類について」『芸文』第二十年第七号。

「原語と故地」『芸文』第二十年第十二号。『一般/八』

注：1943年7月付けの付記がある。

### 1930年

(翻訳) タキトウス「ゲルマーニア(一)」『芸文』第二十一年第四号。

(翻訳) タキトウス「ゲルマーニア(二)」『芸文』第二十一年第五号。

### 1931年

「最近仏蘭西言語学界の展望」(付：アントワヌ・メイエ(1866-1936))『日仏文化』新第七集。『一般/四』

注：執筆は1931年現在、「追補」は1935年5月5日、1935年9月、1943年6月付けの付記あり。

**1932年**

「ラテン語系」『ギリシヤ・ラテン講座 第二部 第三冊 ラテン』（プラトン・アリステレス學會編）、鐵塔書院、1932. 『一般／九』

**1933年**

『言語学概説』文献書院、1933.

注：昭和四年一月より六年八月まで計八回刊の『続国文学講座』所収『言語学概説』の単行本として発刊される。著者名は新村出。

**1934年**

NO!、『アルピオン』第二卷第二号。1934年9月。『一般／十三』

（翻訳）メイエ『史的言語学における比較の方法』政経書院、1934.

（翻訳）フンボルト「史家の課題について」『哲学研究』（京都）第十九卷第九号、総第二二二二号。

**1935年**

「語彙の研究」『国語科学講座 3』明治書院、1935年3月。『一般／七』

「方言の性格」1935年7月の日付がある。『民族／32』

『言語学概論』日本文学社（東京）、1935.

注：昭和四年一月より六年八月まで計八回刊の『続国文学講座』に連載された『言語学概説』の単行本として発刊される。著者は新村出。

**1936年**

「日本の方言研究 — 新しい方言地図の必要 —」、1936年12月27日の日付がある。『民族／31』

**1937年**

「ラテン語におけるI・Uの「相通」について」『音声の研究』第4集、1937年1月。『一般／十』

「日本語における「語原」の観念」1937年7月の日付がある。『民族／34』

「言語学」『新版現代哲学辞典』日本評論社、1941. 『一般／一』

注：付記に「1937年記」とある。

(翻訳) トムセン「昔時の東トルキスタン」『コトバ』1937.4-5.

(翻訳) トムセン『言語学史』(共訳／高谷信一) 弘文堂、1937.

### 1938年

『ヴィルヘルム・フォン・フンボルト』弘文堂(京都)、1938.

注：田邊元監修『西哲叢書』の一冊として刊行される。

### 1939年

『言語の構造』(初版) 弘文堂、1939.

「言語」『哲学教養講座第六巻 文化』三笠書房(東京)、1939. 『一般／二』

「格と時称との一つの場合」1939年4月。『一般／六』

### 1940年

「南魚星」1940年1月10日記、同1月13日追記。『南／二』

「島民のチャモロ語手稿にあらはれたマリアナ諸島の古俗」『南／四』

### 1941年

「ポナペ島の生活と言語 — 再び NO!の問題について、その他」京都言語学談話会、1941年10月。『一般／十四』

(翻訳) タキトゥス『ゲルマーニア』(共訳／田中秀央) 刀江書院、1958.

### 1942年

「ミクロネシアの『ひと』」『京都帝国大学新聞』1942年3月5日。『南／一』

「トラック島民のことわざ」『日本文化』第21号、1942年4月。『南／三』

### 1943年

「古螺城址にゆく」「1943年1月、ハノイにおいて」とある。『南／六』

「突厥語における数詞の組織について」1943年7月の日付がある。『一般／十二』

「トンキンの地方と安南語」『知性』1943年7月。『南／五』

**1944年**

『言語学論攷』敝文館、1944.

**1946年**

「春日煦々」1946年2月。『古典／1』

「世界と日本語」『日本評論』（日本評論社）第21巻第6号、1946年6月。『研究／12』

『『一般言語学と史的言語学（言語学論叢）』の後序』（1946年12月）

『『言語民族学』の後序』（1946年12月）

**1947年**

『言語構造論』（改訂版）創元社（東京）、1947.

(序（1946年9月） 1 語と文 2 言語の構造的分類 3 品詞の区分 4 格について 5 格と時称の発達 6 語の構成（上） 7 語の構成（下） 8 「音韻体系」について 結語)

『一般言語学と史的言語学』増進堂（大阪）、1947.

『言語民族学』（初版）秋田屋（大阪）、1947.

(一 序 二 民族 三 言語と民族 四 等象線とその翕束性 五 Volk と Nation 六 言語圏と民族圏 七 圏の時間的変動 八 民族の測定 九 言語民族学の構想)

「言語の構造について」（日付なし、不明）『民族／2』

「近畿の方言について」（日付なし、不明）『民族／33』

『『人』の名称』（日付なし、不明）『民族／35』

「新しい国字の問題」（日付なし、不明）『民族／36』、『研究／19』

注：後に『言語の研究』（有信堂、1956.）に再度収録される。

「言語」『科学教養講座 社会科学篇 1』三笠書房（東京）、1947年6月。『研究／1』

「言語の構造と精神の形態」『季刊文芸学』（京都）第1号、1947. 『世界／I, 7』

## 1948年

「うましか」『南／七』

『南魚星』の後序」1948年1月の日付がある。『南魚星／後序』

「ことばの起原と日本語の諸問題」『京都新聞』、1948年4月28日『研究／2』

『南魚星』高桐書院（京都）、1948.

(目次 一、ミクロネシアの「ひと」 二、南魚星 三、トラック島民のことわざ  
四、島民のチャモロ語手稿にあらはれたマリアナ諸島の古俗 五、トンキンの地方  
と安南語 六、古螺城址にゆく 七、うましか 後序)

## 1949年

「翻訳論その他」『時論』第4巻第3号（時論社）、1949年3月。『研究／24』

「西洋典籍史考」『ビブリア』（養徳社）第1集、1949年1月。『研究／25』

『比較言語学研究』創元社（東京、大阪）、1949.

「国語はどうなる」『都新聞』、1949年4月28日。『研究／17』

「言語芸術におけるリアリズムの必然性」『人文科学叢書・第三篇』（世界文学社）、

1949年5月。『研究／9』

「言語哲学」下村寅太郎・淡野安太郎編『哲学研究入門』小石川書房（東京）、1949.  
『世界／I, 2』

『古典と現代』甲文社（京都）、1949.

(序（1949年1月） 春日煦々 クレオメネースのこと ヘーラクレスの柱 ホ  
メーロスの「枕ことば」 散文の形態 老 セネカ「閑暇について」 テュッチェフ  
詩抄 ユンク・シュティリンク 一枚のパランプセスト 秋の歌 伝ホメーロス作  
「蛙鼠戦役」)

## 1950年

「ぞうやく — 対馬の方言について —」『毎日新聞』、1950年8月4日。『研究／  
8』

「古島に残る古典的日本語」『学園新聞（京大）』、1950年8月21日。『研究／7』

「ローマ字で書くということ」『ことばの教育』（ローマ字教育会）第12巻第7号、  
1950年10月。『研究／20』

## 1951年

「日本語の系譜について」『国語学』（刀江書院）第5集、1951年2月。『研究／4』

「国語教育の動向」『毎日新聞』、1951年6月12日。『研究／15』

（編著）『ポケット漢和』全国書房、1951。

## 1952年

「日本語の系統について（序説）— 日本語とフィン・ウグール諸語 —」『国語学』（武蔵野書院）第9集、1952年5月。『研究／5』

「日本の敬語」『毎日新聞』、1952年4月9日。『研究／15』

『ラテン広文典』白水社（東京）、1952。

## 1953年

「日本のローマ字問題」『毎日新聞』、1953年2月27日。『研究／21』

「日本語と南島諸語 — 系譜関係か、寄与の関係か —」『民族学研究』第17巻第2号、1953年3月。『研究／6』。

注：後に、『マライ=ポリネシア諸語』に改補して再録される。

「14世紀（コロンブス以前）における北米河川交通ならびに北米渡航を示す一碑文 — The kensington Runic stone —」『金田一博士古稀記念・言語民俗論叢』三省堂（東京）、1953。『世界／II, 4』

「劉向『説苑』巻第一の越歌について」『言語研究』第22・23号、1953。

## 1954年

「読書について」『朝日新聞』、1954年1月18日。『研究／23』

「否定表現の原理 — 一つの意味論的分析 —」『国語国文』第23巻8号、1954年8月。『研究／10』

「日本語の語原と系統について」『東京新聞』、1954年9月9～11日。『研究／3』

「弁論と言語と日本語」『政界往来』（政界往来社）第20巻第9号、1954年9月。『研究／13』

「日本語の効率」『ことばの研究室』（講談社）、1954年12月。『研究／11』

(書評) 「フリース『英語の構造』」『言語研究』第25号、1954年3月。『世界／III, 1』

(編著) 『世界の言語』朝日新聞社出版局、1954.

### 1955年

「日本の敬語をめぐって」NHK 広島放送局より放送、1955年1月19日。『研究／16』

「語順の原理」『国語国文』第24巻第8号、1955年8月。『研究／14』

「めでたいということ」『朝日新聞』、1955年1月7日。『研究／22』

“Mystery of the Japanese Language” Japan Quarterly. Vol. 3. (朝日新聞社)、1955年4月。『研究／26』

「マハチチ・マママハ — インドネシア語と日本語 —」『言語研究』第22・23号。

「マライ・ポリネシア諸語(南島諸語)」市河三喜・服部四郎共編『世界言語概説・下巻』研究社(東京)、1955年。『世界／II, 5』

「比較言語学における共通音韻定立の限界 — マライ・ポリネシア語における \* $\gamma$  について —」『言語研究』第28号、1955年10月。『世界／II, 2』

### 1956年

『言語の研究』(初版) 有信堂、1956.

『言語の研究』の序 1956年4月。

『言語の研究』索引(西田龍雄氏作成)

「敬語法」『ことばの講座 第2巻 これからの日本語』創元社(東京)、1956年7月。『世界／III, 6』

「上代日本語における母音組織と母音交替」『京都大学文学部五十周年記念論集』京都大学文学部、1956年11月。

「世界の言語と日本語」『ことばの講座 第一巻 世界のことば・日本のことば』創元社(東京)、1956.

(翻訳) ウェルギリウス『アエネーイス』『世界古典文学全集 21 ウェルギリウスルクレティウス』筑摩書房、1956.

「マンドヴァのウェルギリウス」『世界古典文学全集 月報』15、第21巻附録、筑摩書房、1965.

**1957年**

(翻訳) サピエア『言語』紀伊国屋書店、1957.

**1958年**

(翻訳) タキトゥス『ゲルマーニア』(共訳/田中秀央) 岩波文庫、岩波書店、1958.

**1959年**

(翻訳) テレンティウス「アンドロスから来たむすめ」『世界文学大系 2 ギリシア・ローマ古典劇集』筑摩書房、1959.

**1960年**

「サピエアについて — その Language を中心として —」『英文法研究』III-11、1960年2月。『世界/5』

**1961年**

「上代日本語における母音組織と母音の意味的交替」『音声科学研究』I、1961.

「科学の研究と人文の研究 — 言語の研究と数理の効用 —」『結晶』(名古屋三浦学園工業大学) 第1号、1961. 『世界/I, 8』

「放射能半減期の公式とスウォデシュの「言語年代論」— 日本の Swadeshism —」(上篇)『計量国語学』第16号、1961年4月。『世界/I, 10』

「放射能半減期の公式とスウォデシュの「言語年代論」— 日本の Swadeshism —」(下篇)『計量国語学』第18号、1961年10月。『世界/I, 10』

(翻訳) キケロー『義務について』岩波文庫、岩波書店、1961.

**1962年**

「言語比較における音韻対応関係設定の不確定性について — 印欧語と主としてハワイ語に関して —」『言語研究』第41号、1962年3月。『世界/II, 1』



「言語と言語の研究における「剰余」の問題」『言語研究』第42号、1962年10月。『世界／I, 9』

(書評) Leisi, Ernst: Das heutige Englisch. Wesenszüge und Probleme 『言語研究』第41号、1962年3月。

(書評) 「ザルツナー『インド・太平洋区域言語地図』」 Salzner, Richard: Sprachenatlas des Indo-pazifischen. 『言語研究』第41号、1962年3月。『世界／III, 2』

「十三世紀教皇空位期樞機院の一書翰」(共著／山口明子) 『富永先生華甲記念古版書誌論叢』・『ビブリア』第二十三号、1962年10月。

(書評) Winfred P. Lehman: Historical linguistics. An Introduction. 『言語研究』第42号、1962年10月。

### 1963年

RECENT TRENDS IN JAPANESE LINGUISTICS Trends in Modern Linguistics. 's-Gravenhage, 1963. 『世界／IV, 1』

### 1964年

「言語が変化するということ」『言語生活』第152号、1964年5月。『世界／I, 3』

### 1965年

A GENEROLOGICAL AND TYPOLOGICAL SURVEY OF THE LANGUAGES OF MICRONESIA —THEIR UNITY AND DIVERSITY— Conference on Linguistic Problems of the Indo-Pacific Area. London, 1965. 『世界／IV, 2』

### 1966年

「標準語の概念について」『言語生活』第172号、1966年1月。『世界／I, 6』

### 1967年

「言語学」『言語教育科学』(広島)第5巻、1967。『世界／I, 1』

「第11回太平洋学会議言語学部会」『言語研究』第51号、1967。

『言語の構造』(増補版) 紀伊国屋書店、1967。

## 1968年

『ヨーロッパの言語』岩波書店、1968.

「中期朝鮮語の母音調和と母音交替」(共著/羅鐘浩)『言語研究』第52号、1968.

「下セルビア語」SE BLYSKA ; ドイツ語 UNTER — パウル:『言語学史原理』への覚書 —』『言語研究』第53号、1968年3月。『世界/II, 3』

Ditopical Expression in Japanese and Other Languages. 『言語研究』第53号、1968年3月。

「言語の近代化とは」『言語生活』第200冊記念号、1968年3月。『世界/I, 4』

(書評) N.CHOMSKY:TOPICS IN THE THEORY OF GENERATIVE GRAMMAR Current Anthropology, Vol.9. No.2-3. April-June 1968, p.130. 『言語研究』第52号、1968年1月。『世界/III, 3』

「西洋古典のことばと西洋古代の弁論」『岩波書店『アリストテレス全集』第16巻月報』、1968年12月。『世界/II, 7』

## 1969年

「言語の内界 — 西の言語と東の言語 — 京都大学最終講義」1969年2月1日。『世界/V』

「故新村出先生」『言語研究』第54号、1969.

(翻訳) デ・サンデ『天正遣欧使節記』(共訳)『新異国叢書5』雄松堂書店(東京)、1969.

## 1970年

『言語の世界』筑摩書房、1970.

『『言語の世界』の跋文』1970年1月の日付がある。

DITOPICAL EXPRESSION IN JAPANESE AND OTHER LANGUAGES  
10th. Intern. Congr.of Ling-Bucharest,1970. 『世界/IV, 3』

「印欧語二題」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』(東京外国語大学)第10号、1970年8月。

「服部氏の華甲記念論集を読む」『英語青年』Vol.CXVI. -No. 11, 1970.

### 1971年

(監修) マルティネ編『近代言語学大系 (四巻)』紀伊国屋書店、1971-1972.

(翻訳) F. フランソワ「言語活動とその機能」(共訳/堀井令以知)『近代言語学大系第一巻 言語の本質』紀伊国屋書店、1971.

(翻訳) F. フランソワ「言語活動の一般的性格」(共訳/堀井令以知)『近代言語学大系第一巻 言語の本質』紀伊国屋書店、1971.

「近代言語学大系・総序」『近代言語学大系第一巻 言語の本質』紀伊国屋書店、1971.

### 1972年

「金田一京助先生の思い出」『言語研究』第62号、1972.

『近代言語学大系第二巻 世界の言語』後記『近代言語学大系第二巻 世界の言語』紀伊国屋書店、1972.

『近代言語学大系第三巻 言語と人間』後記『近代言語学大系第三巻 言語と人間』紀伊国屋書店、1972.

『近代言語学大系第四巻 言語の構造』後記『近代言語学大系第四巻 言語の構造』紀伊国屋書店、1972.

『吉利支丹における日本語学の潮流』天理大学出版部、1972.

### 1973年

「全集のあとに」『新村出全集第十五巻月報』筑摩書房、1973年9月。

「数詞の世界」『言語生活』筑摩書房、1973年11月。

注：後に『印欧語における数の現象』(大修館、1978.)に「補説」として再録される。

### 1974年

「複数・単数・複個数 (一)」『言語』Vol.3. No.4. 1974.

「複数・単数・複個数 (二)」『言語』Vol.3. No.5. 1974.

「複数・単数・複個数 (三)」『言語』Vol.3. No.6. 1974.

「複数・単数・複個数 (四)」『言語』Vol.3. No.7. 1974.

- 「双数について (一)」『言語』 Vol.3. No.8. 1974.  
 「双数について (二)」『言語』 Vol.3. No.9. 1974.  
 「双数について (三)」『言語』 Vol.3. No.10. 1974.  
 「双数について (四)」『言語』 Vol.3. No.11. 1974.  
 「双数について (五)」『言語』 Vol.3. No.12. 1974.

注：後に『印欧語における数の現象』（大修館、1978.）に改補し、再録される。

「崎山理著『南島語研究の諸問題』序文」『南島語研究の諸問題』弘文堂、1974.

### 1975年

- 「双数について (六)」『言語』 Vol.4.No.1.1975.  
 「双数について (七)」『言語』 Vol.4.No.2.1975.  
 「双数について (八)」『言語』 Vol.4.No.3.1975.  
 「双数について (九)」『言語』 Vol.4.No.4.1975.

注：後に『印欧語における数の現象』（大修館、1978.）に改補し、再録される。

『マライ＝ポリネシア諸語 — 比較と系統 — 』弘文堂（東京）、1975.

（はしがき マライ＝ポリネシア（南島）諸語概説 はしがき — ミクロネシア  
 マライ＝ポリネシア諸語分布範囲の定立 マライ＝ポリネシア諸言語とその三語  
 派 三語派の区別の比較言語学的根拠 マライ＝ポリネシア諸語の音韻 マライ＝  
 ポリネシア諸語の語詞構成 マライ＝ポリネシア諸語の文法体系とその種々性 文  
 例 ミクロネシア諸言語分布の過程 ミクロネシア諸言語の構造的種々性について  
 ミクロネシア諸言語における数詞の比較 阿波本静嘉堂本満刺加譯語の数目門と  
 チヤム語 南ヴェトナムにおけるチャム語の系統 日本語と南島（マライ＝ポリネ  
 シア）諸語 UN COUP D'OEIL SUR LA LANGUE TS'Ü : K 索引）

### 1976年

- 『言語研究とフンボルト — 思想・実践・言語 — 』弘文堂（東京）、1976.  
 「言語研究の歴史」『岩波講座日本語 1 日本語と国語学』岩波書店、1976.  
 「フンボルト」『言語』 Vol.5.No.1.1976.  
 （翻訳）ウェルギリウス『アエネーイス（上・下）』岩波文庫、岩波書店、1976.

**1977年**

(翻訳) メイエ『史的言語学における比較の方法』(改訂版) みすず書房、1977.

**1978年**

「言語における性について」『言語』Vol.7.No.6.1978.

「前号「言語における性について」補説」『言語』Vol.7.No.7.1978.

「比較言語学とはなにか — タキトゥス「ゲルマーニア」とゲルマン語 —」『言語』Vol.7.No.11.1978.

『印欧語における数の現象』大修館、1978.

**1979年**

『流動』1979年6月増刊号に卒業論文の一部を掲載。

注：『私の卒業論文』（1981.）による。

「サビアの『言語』」『言語』Vol.8.No.2.1979.

**1980年**

「第一回日本印欧学研究者専門会議会議担当編者序言」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第一巻第2号、1980.

「上代イタリアのウェネティ어의言語 — 特にその動詞形について —」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第一巻第2号、1980.

「言語と私」『言語』Vol.9.No.6.1980.

「印欧学論叢・イタリア上代のウェネティ어의言語」『言語』Vol.9.No.8.

「言語表現における合理と情理」『言語生活』1980年10月号。

**1981年**

「第二回日本印欧学研究者専門会議会議担当者序言」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第二巻第2号、1981.

「Skr.(á-)bhū-t, Gr.(ě-)φύ[τ]について」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第二巻第2号、1981.

「印欧語における英語の動詞 know と knew」『言語』Vol.10.No.3.1981.

「私の卒業論文」『言語』Vol.10.No.7.1981.

(報告)「第3回印欧学研究者専門会議」『言語』Vol.10.No.10.1981.

### 1982年

「第三回日本印欧学研究者専門会議担当者序言」1982年1月記とある。『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第三巻第2号、1982.

「印欧語における完了形 — 介在する能格性 —」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第三巻第2号、1982.

(エッセー)「進展する日本の言語研究 — 言語における意識点について —」『言語』Vol.11 No.1.1982.

(エッセー)「外国語の理解」『言語』Vol.11 No.5.1982.

「英語の準完了的表現と完了形」『言語』Vol.11 No.7.1982.

「上代インド語の完了形と非人称表現」『言語』Vol.11 No.8.1982.

(報告)「第4回日本印欧学専門家会議」『言語』Vol.11 No.11.1982.

### 1983年

「第四回日本印欧学研究者専門会議担当者序言」1983年1月27日記とある。『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第四巻第2号、1983.

「印欧語の完了形とヒッタイト語の動詞体系」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第四巻第2号、1983.

「遺稿・印欧語の完了形とヒッタイト語の動詞体系」『言語』Vol.12. No.8. 1983.

### 付録:

「泉井久之助先生のご逝去を悼む」(堀井令以知)『言語』Vol.12. No.8. 1983.

「泉井久之助年譜」『言語』Vol.12. No.8. 1983.

「泉井久之助先生と言語研究」(西田龍雄)『言語研究』第84号、1983.

「泉井先生の思い出」(関本 至)『言語研究』第84号、1983.

「泉井久之助(1905～1983)」(堀井令以知)

### 1985年

「泉井久之助先生と印欧学」(堀井令以知)『京都産業大学国際言語科学研究所報』第六卷第2号、1985.

## 略語一覧：

- |      |               |
|------|---------------|
| 『民族』 | 『言語民族学』       |
| 『南』  | 『南魚星』         |
| 『一般』 | 『一般言語学と史的言語学』 |
| 『古典』 | 『古典と現代』       |
| 『研究』 | 『言語の研究』       |
| 『世界』 | 『言語の世界』       |

## 編集後記：

ここに列挙した泉井久之助先生の著書論文目録はけっして先生の著作のすべてを網羅したとは言えない。より完璧な著書論文目録の編集は今後の調査を待たなければならぬが、この著書論文目録の公表を機に、広く有志よりの情報提供をお願いしたい。そして一日も早く先生の著書論文目録を完成させたいと願ってやまない次第である。